説明会及び意見交換会の概要

日　　時	平成２５年　１０月　２日　（水）　１９：３０～２１：００		
対象団体	神戸小学校ＰＴＡ	参 加 者 数	２５人
場　　所	神戸小学校		
出 席 者	校区審議室（神谷、小谷、清水）、竹内地域・家庭教育係長		

	主な意見、質問等	質問に対しての回答
1	学校が統合した場合で子供たちが受けたメリット、デメリットにはどういうものがあったのか。学校が変わって不安になったとか、友達が増えて良かったとか、情報提供して欲しい。具体的な事例で教えていただきたい。	個人的な主観だが、千代南中では統合したら部活動がしやすくなった。例えば、統合前はバスケットのチームが組めなかったが、統合後には大会に出場出来るようなったと聞く。統合した当初は馴染めず戸惑いがあったというが、佐治と用瀬は以前から交流があったので、生徒間に溝はなく、すんなり打ち解けることが出来ている。
		青谷では５つの小学校が１つになり、４地区から学校は消えた。保護者の間では、少人数の教育に不安を覚えていたので、結果的には良い選択だったと話している。やはり統合となると、当初は子供たちも戸惑いがあったが、すぐに慣れてくることが出来ている。スポーツ少年団の活動では、旧校区では子供の数も少なく活動が出来なかったが、統合で５地区全ての児童が対象となり、今では様々なスポーツ少年団の活動が出来ている。ただ統合で校区が広がり、遠隔地の友達が増えたため、低学年の児童同士がお互いの家に遊びに行くことが難しくなった。親が友達宅に送迎することも多くなったことは事実である。
2	小学校が無くなった青谷地区の４校区の人口推移はどうか。	学校の有る無しに関わらず、青谷町の人口は減少傾向である。学校が無くなったから人口が減ったのか、若い世代が地区から離れて子供が減ったから学校が無くなったのか、これは個人の考え方で変わってくる。高齢化が進み人口が減少傾向にある地区は勿論ある。宅地開発され人口が増えた地区もある。住民が地域活性化に取り組んで、人口がほぼ横ばいの地区もある。これは地区公民館が主体となり地域活動を頑張っているからだが、言えることは、どの地区も積極的に子供たちと関わり、まちづくりに取り組んでいるということ。
3	青谷小の統合のとき、交通手段はどうだったか。金額的な負担等はどうだったか。定期代の半額補助とか具体的な金額はいくら位なのか。	遠距離の際の通学手段は、スクールバスの運行や路線バスの利用が考えられる。本市の遠距離通学費補助金制度は、市内の何処に住んでいても保護者が交通費の一定額（小学生で２，４３０円／月）を負担すれば、交通費の残額全てを補助するもの。第二子、第三子の優遇措置もある。

説明会及び意見交換会の概要

	主な意見、質問等	質問に対しての回答
4	国の規定に、通学距離は小学校は４Ｋｍ、中学校は６Ｋｍというのがあるが、今現在、小学校から岩坪までは４Ｋｍ以上ある。一つの選択肢として統合があると思うが、そうなると更に通学距離が伸びることになる。路線バスの活用と言うが、本数も少なく、運行時間も利用出来ないものが多い。	路線バスを利用しても学校に到着する頃には授業が始まっているとか、部活動をしたら終便が終わっているなど、路線バスがあっても利用したい時間に便が無いなら通学には使えない。そのような場合は、スクールバスの運行を考えるケースに当たる。利用出来ないものを利用しなさいと無責任なことは言わない。
5	中学校の話だが、部活動をしている場合、現時点でもバスの便がないので、親が自家用車で送迎することが多い。神戸の生徒のために、部活動の終了時間が考えられている訳ではない。土曜日の部活動の後には実際バスがない。午前中に部活動が終わっても、バスが来るのは午後２時だ。	運行時間については、児童生徒が利用しやすい運行ダイヤになるよう、バス会社と協議は可能だ。今までもダイヤ調整は申し入れをしてきている。しかし、バスは民間会社であり、採算が取れないと判断すれば困難な場合もある。今後とも取り組んでいかなければならない問題と思っている。
6	（※上記１に関連する情報提供として）	小中一貫校の取り組みを紹介する。吉岡地区に湖南学園が出来て６年目になる。小中の先生が連携して系統立てた教育を行ったり、低学年が高学年に刺激を受けて勉強に取り組むので、子供たちの学力が上がっている。小中の先生の間で情報交換を密にし子供たちに接する中で、早期に問題が発見出来ており、今、不登校はゼロになっている。高学年が低学年の面倒を見ており、思いやりの心が育っている。また地域が学校を守るという意識から、学校を核としたまとまりが生まれるようになったという。
7	学校が無くなると地域が寂しくなるといった声がよく聞かれると言うが、青谷では小学校が無くなった地域に対し、学校側から何らかの働き掛けがあったりしたのか。公民館がイベントや行事など積極的に行うと言うが、学校側から話があったのだろうか。	学校側から公民館側に小学生が参加するイベントを組んでくださいと頼むのではなく、逆に公民館側から学校側に働き掛けている。これまでは、公民館事業は地区（旧小学校区）内の周知にとどまることが多かったが、今では他の地区にも参加を広く呼び掛けることが出てきた。地区住民は勿論のこと、地区外の皆さんも一緒にやりましょうという姿勢である。例を挙げれば、敬老会での合唱披露がある。先日、児童が減少している地区で敬老会が開かれたが、地区の児童だけでは合唱もままならず、他地区から広く小学生の参加を募り、歌と踊りを披露したことがあった。統合となった今、公民館をまたいで子供たちは行き来している。学校や行政任せというのではなく、公民館やそこに住む人が自ら考え活動に取り組んでいるのが現状ではないだろうか。
		地域の状況もあるが、小学校が地域の核となって取り組み、校長先生もそれぞれの地域の良さ、魅力といったものを子供たちに伝えている。

説明会及び意見交換会の概要

	主な意見、質問等	質問に対しての回答
8	友達からは、小中一貫校では小学６年生と中学１年生との区切りが無く、卒業式や修学旅行も無いので、なあなあで過ごしている感じだと聞いている。湖南学園の例を挙げられたが、もし小中一貫校になるとしても、これまでどおり卒業式や修学旅行といったイベントが出来る学校を作れるのか。	湖南学園の場合は、初等ブロック（１年～４年）、中等ブロック（５年～７年）、高等ブロック（８年～９年）に分けている。節目は断絶になってしまう場合とケジメになる場合の両面がある。湖南学園も６年経ち、ある意味での節目は必要だと思っている。節目を作ると、それを乗り越える作業も必要になるが、考え方もそれぞれであるし、それが学校の特色になると思う。色々な選択肢があると思う。
9	小中一貫校を作るにしても、こういった特色のある学校を作りましょうという提案は出来るのか。	正にその通りで、小中一貫校にすればいい、統合すればいい、単独校で残せばいい、という結論のみを求めるのでなく、それぞれ「どんな学校にしたい」という議論を中心にお願いしたい。
10	コミュニティスクールとは何か。	本市でもコミュニティスクールへの取り組みが始まって来ている。これからは学校だけで子供たちを教育出来る時代ではなく、学校と家庭、地域が一緒になって教育に取り組もうという試みである。このため、学校側が地域の思いや願いを反映した学校づくりを行う一方で、地域も学校の活動をサポートしていく、一緒に学校を作っていくという仕組みである。事例として、地域の高齢者が学校運営に関わり、高齢者の生きがいが出来たという話も聞く。地域の良さは地域に暮らす人が一番よく知っている。教育面も然ることながら、地域と学校とが両輪となり、学校が地域の核となることで、地域の活性化につながるとも考えている。
11	校区審議会とは一体どういう組織なのか。どんな人がいて、どんな時期に話し合いが持たれているのか。なぜ校区審議会が必要なのか。	小中学校の校区のあり方を教育委員会が決めるのではなく、中立な第三者機関を設置して議論を進めている。それが校区審議会となる。現在の委員は学識経験者８人、一般公募４人の計１２人で構成されており、平成２６年の答申を目指して協議している。教育委員会が暴走しないよう置かれている組織だと思っている。校区審議会の答申を受けたのち、教育委員会が方向性を決定することになる。教育長も話しているとおり、校区審議会や教育委員会は地域の意向を無視して、物事を決定する気はない。地域で出された方向性を尊重し、地域と共に学校を創っていくことになる。お願したいことは、個人個人の意見ではなく地域としての方向性をまとめていただきたいということ。方向性をまとめる組織を立ち上げていただきたいということである。

説明会及び意見交換会の概要

	主な意見、質問等	質問に対しての回答
12	これまでに地域で出された意見はホームページに載っているが、資料は膨大となっているようだが。	
13	校区審議会が進み、新たな情報が出てきたら教えて欲しい。説明会は何度でも開いていただけるのか。	希望があれば、どんどん申し出て欲しい。昼夜、祝祭日問わず対応させていただく。